

今週の為替相場見通し(2024年4月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		151.58 ~ 153.39	153.27	152.00 ~ 154.50
ユーロ	(ドル)		1.0623 ~ 1.0885	1.0642	1.0450 ~ 1.0750
(1ユーロ=)	(円)		162.30 ~ 165.15	163.10	161.00 ~ 165.00
英ポンド	(ドル)		1.2427 ~ 1.2709	1.2449	1.2350 ~ 1.2750
(1英ポンド=)	(円)	*	190.00 ~ 192.98	190.75	189.00 ~ 194.00
豪ドル	(ドル)		0.6457 ~ 0.6644	0.6463	0.6400 ~ 0.6550
(1豪ドル=)	(円)	*	98.74 ~ 100.81	99.06	98.00 ~ 100.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1)今週の予想レンジ: 152.00 ~ 154.50 円

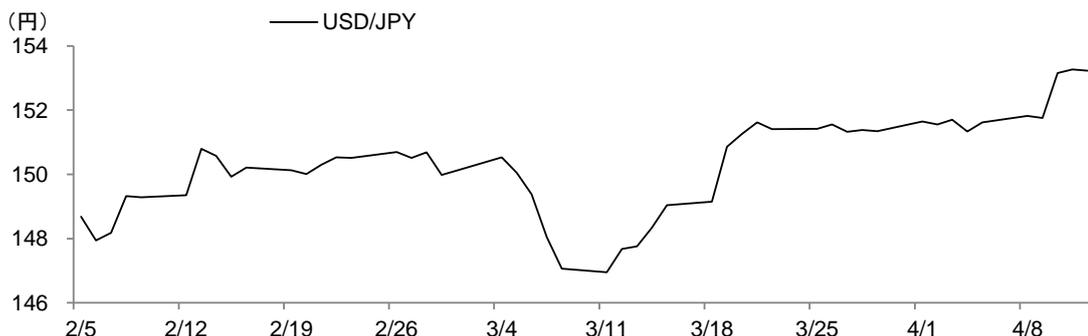
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

4月8日週のドル/円は横ばい推移後、高値を更新した。151.68円で週初東京市場オープンを迎えたドル/円は海外時間に米金利上昇にドル買い優勢。クロス/円は上昇したが、ドル/円は介入警戒感が強く151.94円まで。9日は日銀の物価見直し修正の可能性についての報道があるも、円買いは限定的。北米時間につけた151.58円が週間安値に。その後は米物価指標を前に動きづらい展開。10日に入っても日本時間は151.80~90円レベルで膠着。北米時間に米3月CPIが事前予想を上回る内容となると152円台半ばへ急伸。その後も上昇が続き、大台153円を突破。11日は日本時間に神田財務官の「あらゆる手段排除せず」とのけん制発言や、個人投資家勢の売りなどもあり、152円台に下落するも調整は浅くすぐに153円台を回復。12日は東京時間公示仲値にかけて153円を割り込むも152円台での推移は短く、すぐに153円を回復。欧州時間入りのタイミングで153.39円の高値を示現。北米時間では中東情勢不安からリスク回避の動きで米債が買われるとやや円高に振れ、152.60円まで下げる。ただ調整は一時的となり、米債利回りが戻す展開にドル/円も水準を戻し、153.27円で越週となった。

4月15日週のドル/円は高値圏での推移を想定。5月FOMCまでの米国指標はいったん出尽くし感がある中で、年内利下げ2回のコンセンサスは不変。米国側に大きくマーケットを動かす材料がないとすると、本邦側にテーマを求め、日銀動向の観測記事に注目しながら相場が上下するような展開を想定。先週前半まではドル/円相場が膠着する中で「152円を超えたら介入」という観測も一部では聞かれたが、実際は153円を超えても動かず。引き続き154円や155円の水準、あるいは日銀会合前後という「タイミング」での介入期待もあるが、鈴木財務相が物価高について幾度となく言及、日銀の発信が今までになくタカ派化していることを鑑みると、当局は「実弾介入」よりも「金融政策期待」で円安を抑制したいと考えているかもしれない。その場合は介入とは異なり、短期的かつ大きな値幅の円高は期待しづらいだろう。あくまで、次回日銀会合に向けた思惑に注目しておきたい。指標関連では今週は15日(月)に米3月小売売上高、17日(水)にベージュブック公表などが予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/8~4/12)の値動き: 安値 151.58 円 高値 153.39 円 終値 153.27 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0450 ~ 1.0750 161.00 ~ 165.00 円

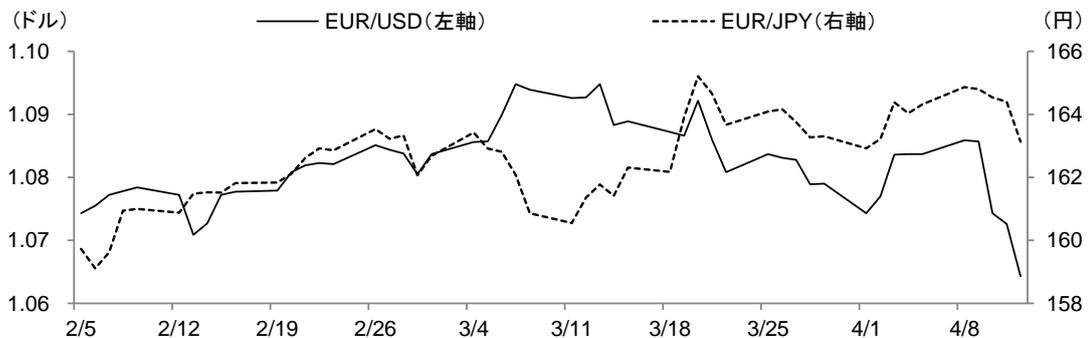
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初8日のユーロは1.0828でオープン。中東情勢リスクが一旦和らぐ中でも、特段目立ったイベント等がなく、1.08台半ばを中心に方向感のない値動きに終始した。9日は米金利の低下を背景に、一時週間高値となる1.0885まで上昇。ただ材料不足で決定打を欠き、結局1.08台半ばまで値を戻してクローズした。10日は米3月CPIの発表を控え、しばらくは方向感なく推移。注目の米3月CPIが、総合、コアともに予想を上回る結果となると急速にドル買いが進み、1.08台半ばから1.07台前半まで急落。利下げに慎重な姿勢が示されたFOMC議事要旨の公表もあり、その後も上値の重い値動きとなった。11日は前日の米3月CPIの結果を受けたドル高地合いが続く中、ECB政策理事会では5会合連続の政策金利据え置きが決定。市場予想通りではあったものの、ラガルドECB総裁の会見で6月の利下げが示唆されたこともあり、ユーロ売りが進むと一時1.07割れまで下落。同水準での買い需要は確認されたものの、その後の反発は一部に留まった。12日は前日と同様の流れにECB高官のハト派発言も相まって、ユーロは軟調な推移が継続。一時週間安値となる1.0623まで下落後やや値を戻すも、1.06台半ばでは上値重く推移し、1.0642で越週した。

今週のユーロ相場は、引き続き軟調な推移になることを予想する。11日(木)にはECB政策理事会で5会合連続の政策金利据え置きが決定された。声明文では「インフレが持続的に目標に収まっていることに確信が持てれば、金融政策の引き締めレベルを下げるのが適切」といった趣旨で利下げに向けたポジティブな内容が示された上、ラガルドECB総裁の会見でも6月利下げ開始を示唆する内容が読み取れた。今会合でも数人の委員が利下げを主張したことも併せて明らかにされたが、利下げ思惑が後退している米国に先立って欧州が金融緩和に至る可能性が高まっており、今後の金融格差がユーロの軟調推移につながりそうだ。一方、米国は雇用環境に引き続き失速する兆候が見えない。10日(水)に発表された米3月CPIで、インフレ進行に予想以上に強い粘着性が示される中、市場が想定していた6月利下げは現状ほとんど織り込まれておらず、堅調な景気動向と相まって、ドル高が進みやすい環境だ。他の主要中銀でもそう遠くない未来に利下げ開始が想定される中、ユーロに限らず多くの通貨で進むであろうドル高地合いが、ユーロの上値を押さえる要因になると考えている。今週の主な経済指標として、16日(火)に独4月ZEW景気期待/調査現状指数、ユーロ圏4月ZEW景気期待指数、ユーロ圏2月貿易収支等の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/8~4/12)の値動き: (対ドル) 安値 1.0623 高値 1.0885 終値 1.0642
(対円) 安値 162.30 高値 165.15 終値 163.10



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2350 ~ 1.2750 189.00 ~ 194.00 円

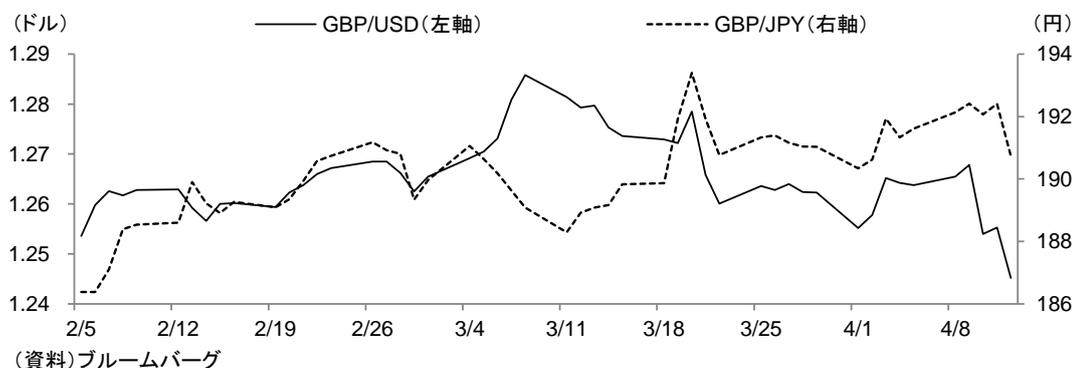
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルで約1.5%下落。4月10日に発表された米3月CPIが市場予想を上回る結果となったことを受けて、グローバルに中央銀行の利下げ期待が後退し、ドル高を促した。他の主要通貨に対してはまちまちな動き。ドルに対して1.8%下落したユーロに対してはポンドは上昇。4月11日の欧州中央銀行の金融政策決定会合において5名の理事が即時の利下げを主張していたことが伝わった。一方、日本円の対ドル下落率が1.0%に留まったこともあり、ポンドは対円で小幅に下落。ドル/円は「介入水準」という見方もあった183円を上回って推移しており、介入観測からドル/円及びクロス/円の上値の重い状況だ。イングランド銀行(BOE)の金融政策では、グリーン委員が4月11日付の英FT紙に寄稿し、英国の利下げは「まだ先のことだ」との考えを示している。とりわけ、英国の賃金上昇とサービスインフレについて、低下はしているものの、他の先進国、特に米国よりは高い水準にあることを指摘している。また、4月12日には元FRB議長のバーナンキ氏による経済予測手法の点検に関する報告書が発表されている。全86ページに及ぶ報告書では、経済予測のあり方だけではなくインフラや人事制度といった中銀組織の運営体制の弱点も指摘されている。短期的な市場の反応を引き起こすような内容ではなかったが、今後、市場とのコミュニケーション手法にも見直しが行われる可能性がある。

今週1週間の英ポンド相場は、上値の重い展開が想定される。16日(火)に労働市場関連指標、17日(水)に英3月CPI、英3月小売売上高が発表される。特に、BOEの金融政策の動向を見極めるうえではCPIが重要だろう。ブルームバーグ集計の民間エコノミスト予測では、英CPIは2月の前年同月比+3.4%から3月には同+3.1%へと伸び率の減速が見込まれている。食料品の価格上昇率の鈍化や、賃金の伸び率減速を受けたサービスインフレ率の伸び鈍化が確認される公算が大きい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/8~4/12)の値動き: (対ドル) 安値 1.2427 高値 1.2709 終値 1.2449
(対円) 安値 190.00 高値 192.98 終値 190.75



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6550 98.00 ~ 100.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台半ばでオープン。週初8日、イスラエルがガザから一部部隊を撤収させているとの報道など地政学リスクが和らいだことを受けてリスクセンチメントの改善から豪ドルは0.66台へ底堅く推移した。9日は朝方に発表された豪4月消費者信頼感が景気先行懸念から前回値を下回るも、豪ドルは米金利低下や銅や鉄鉱石など資源価格の上昇が下支えとなり0.66台半ばに底堅く推移した。10日、豪ドルはNY時間に発表された米3月CPIが市場予想を上回り、米金利の上昇に一時0.65台割れまで急落した。11日、豪ドルは、中国国有銀行が中国元の下支えに向けオンショア市場で大規模なドル売りを行ったことやNY時間にはハイテク銘柄中心とした米国株が上昇する動きに支えられ0.65台半ばで引けた。12日、豪ドルは0.65台前半での推移が続いたのち、「イスラエル、数日中にイランから直接攻撃も警戒-関係者」との報道に中東情勢の地政学リスク高まりにドル買い優勢となると0.64台半ばまで急落、同水準で越週した。

今週の豪ドルは上値の重い推移を予想する。先週に発表された米3月CPIは市場予想を上回りインフレの加速リスクが再燃する結果に。その後のFRB高官から示されたタカ派な姿勢も相俟って、6月利下げの可能性が限りなく低下する中、米金利上昇にドルが全面高の展開となった。従前RBAはFRBよりもやや遅れて24年後半の利下げ開始となる可能性が高かったが、前述したように堅調な米雇用指標や根強いインフレ指標の結果を受けて、FRBによる利下げが後ずれないし回数が減る可能性が高くその見通しが剥落する格好に。米金利の先高感にドル高が意識されやすい状況では豪ドルの上値は重くなると予想する。加えて、先週末にはイランやイスラエル間の地政学リスクが再び高まりを見せた。週明け時点では若干落ち着きを見せているが、今後もイスラエルによる報復など中東情勢が悪化する場合にはリスクオフ的なドル買いが予想される。一方で、豪ドル買いの材料としては中国、豪関連の経済指標の結果によるか。16日(火)に中国1~3月期GDP、18日(木)に豪3月雇用統計の発表が予定されている。中国の需要回復が期待される場合や豪の良好な雇用指標を受けて利下げ期待が後退する場合には豪ドル買いに繋がりがやすいか。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/8~4/12)の値動き: (対ドル) 安値 0.6457 高値 0.6644 終値 0.6463
(対円) 安値 98.74 高値 100.81 終値 99.06



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。